



学内広報



2001. 11. 28
東京大学広報委員会

千葉演習林公開講座「緑の教室」を開催



(6 ページに関連記事)

目次

一般ニュース	2	部局ニュース	5
大学院運営組織規程の一部改正、東京大学 名誉博士称号授与規則等の制定、附属図書 館長の選考内規等に関する暫定措置を定め る規則の制定、東京大学宇宙線研究所附属 神岡宇宙素粒子観測装置「スーパーカミオ カンデ」の破損事故等に係る事故対策委員 会等の設置、名誉教授制度検討委員会報告		人文社会系研究科・文学部で外国人留学生 見学旅行を実施、文学部就職ガイダンス開 催される、千葉演習林公開講座「緑の教室」 を開催	
特別記事	4	掲示板	7
宇宙線研究所附属神岡宇宙素粒子研究施設 (スーパーカミオカンデ)における光電子 増倍管破損についての記者会見		平成13年度教育実習・介護等体験懇談会開 かれる、ソウル国立大学混成合唱団・東京 大学音楽部コールアカデミージョイントコ ンサートの開催について、特別講義と公開 討論会開催のお知らせ、東京大学環境安全 研究センターシンポジウム開催について	
		事務連絡 (人事異動)	11
		訃報 (藤田夏樹教授)	11
		淡青評論「分散の分散」	12

≡ 一般ニュース ≡

評議会（11月20日（火））承認事項

大学院運営組織規程の一部改正

東京大学大学院運営組織規程の一部を改正する規則

研究科委員会委員に、学内共同教育研究施設及び全国共同利用施設並びに情報学環の教官も推薦できるようにするため、所要の改正が行われた。

附 則

この規則は、平成13年11月20日から施行する。

東京大学名誉博士称号授与規則等の制定

東京大学名誉博士称号授与規則

平成13年11月20日

評議会可決

（目的）

第1条 この規則は、学術文化の発展に特に顕著な貢献をした者、又は東京大学（以下「本学」という。）の

（授与の要件）

第2条 名誉博士の称号は、次の各号の一に該当する者に授与することができる。

- (1) 学術文化の発展に特に顕著な貢献があり、本学において顕彰することが適当と認められる者
- (2) 本学の教育研究の発展に関して、国際的観点からその功績が特に顕著であった者

（推薦及び授与手続）

第3条 総長は、前条に該当すると認められる者がいる場合、評議会の議を経て、名誉博士の称号を授与する。

2 前項のほか、部局長は、前条に該当すると認められるものがある場合、当該部局の教授会等の議を経て、これを総長に推薦することができる。推薦に当たっては、別記様式1の推薦書を提出するものとする。

3 総長は、前項の推薦があったときは、評議会の議を経て、名誉博士を称号を授与する。

4 評議会において、名誉博士の称号授与の議決をするためには、評議員定数の2分の1を超え、かつ、外国出張中の者を除く評議員総数の4分の3以上の者が出席し、出席者の4分の3以上の者の賛成がなければならないものとする。

（審査委員会）

第4条 総長は、前条の規定により名誉博士の称号を授

会」という。)を設置し、審査を行うものとする。

2 審査委員会は、総長、副学長、各研究科長（研究科以外の教育研究上の基本となる組織の長を含む。）及び各附置研究所長（先端科学研究センター長を含む。）で組織する。

3 審査委員会に委員長を置き、総長をもって充てる。

4 審査委員会は、必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求め、意見を聞くことができる。

5 前各項に定めるもののほか、審査委員会の運営に関し必要な事項は、審査委員会が定める。

（名誉博士記の交付）

第5条 名誉博士の称号を授与するときは、別記様式2により名誉博士記を交付する。

（細則）

第6条 この規則に定めるもののほか、名誉博士の称号授与に関し必要な事項は別に定める。

附 則

この規則は、平成13年11月20日から施行する。

東京大学名誉博士称号授与に関する申合せ

平成13年11月20日

評議会可決

東京大学（以下「本学」という。）における名誉博士の称号授与については、東京大学名誉博士称号授与規則（以下「規則」という。）の定めによるほか、次のとおり申し合わせるものとする。

1. 名誉博士の称号を授与するに当たっては、当分の間、規則第2条に定める他、次の各号を考慮するものとする。
 - (1) 国外における教育研究上の功績、学術文化の発展への貢献が特に顕著な者を優先する。
 - (2) 定員内の教職員として本学に在籍し又は在籍したことのある者は、原則として、授与対象としないものとする。
2. 称号を授与する際には、授与される者の功績を記載した文書を添付するものとする。
3. 名誉博士の称号を授与された者は、授与に際し、講演を行うことを常例とする。

附属図書館長の選考内規等に関する暫定措置を定める規則の制定

東京大学附属図書館長の選考内規等に関する暫定措置を定める規則

第1条 この規則は、東京大学附属図書館長（以下「館長」という。）の選考等に関する暫定措置を定めることを目的とする。

第2条 東京大学附属図書館長選考内規は、平成17年3月31日までの間、その施行を停止する。

第3条 館長は、総長が指名する副学長をもって充てる。
 第4条 館長の任期は、東京大学附属図書館基本規則第5条の規定にかかわらず、前条に定める副学長の任期と同一とする。

第5条 この規則に定めるもののほか必要な事項は、総長が別に定める。

附 則

- 1 この規則は、平成13年11月20日から施行する。ただし、第3条及び第4条の規定は、平成14年4月1日から施行する。
- 2 この規則は、平成17年3月31日限り、その効力を失う。

(参考)

平成13年10月15日

総長 佐々木 毅 殿

附属図書館問題懇談会
 座長 小 間 篤

附属図書館問題懇談会報告

本懇談会は、平成14年度概算要求の副学長増員要求に伴う限定的な課題について、全学的な見地から検討を行うため、平成13年9月18日に評議会の下に設置された。

副学長概算要求に伴う限定的な重要事項として、①図書館長選考内規の暫定措置、②図書館長任期の暫定措置、③評議会における副学長・図書館長の位置付け、の3事項について具体案を提案しその審議を求める、との諮問を受け、10月の評議会に報告すべく上述の諮問事項について検討を行った結果、下記の結論を得たので、ここに報告する。また、別添の「東京大学附属図書館長の選考内規等に関する暫定措置を定める規則」(案)を作成したので併せてこれを提出する。

記

- ① 平成14年度から16年度の暫定措置として、以下の措置をとる。
- ② 附属図書館長選考内規を暫定的に停止し、総長が指名して評議会承認を得た副学長を附属図書館長に兼務任命する。
- ③ 副学長が兼務する附属図書館長の任期は副学長任期とする。
- ④ 附属図書館長兼務を予定する副学長の指名に当たっては、総長は当該事情に配慮する。
- ⑤ 附属図書館長を兼務する副学長は、「財務・施設関係」を担当しない。
- ⑥ 附属図書館長としての評議会における位置付けは、従来の評議会内規第1条の2に規定する位置付けと同一とする。
- ⑦ 上記の暫定措置をとる期間内の図書行政のあり方については、図書行政商議会の検討に委ねる。

附属図書館問題懇談会メンバー

座 長 小間副学長
 委 員 渡邊法学部長

小宮山工学部長
 佐藤文学部長
 佐藤理学部長
 林農学部長
 堀内経済学部長
 廣井社会情報研究所長
 福山物性研究所長
 落合附属図書館長
 加瀬総長補佐
 近山総長補佐

評議会（11月20日（火））報告事項

東京大学宇宙線研究所附属神岡宇宙素粒子観測装置「スーパーカミオカンデ」の破損事故等に係る事故対策委員会等の設置

平成13年11月12日

総長裁定

東京大学宇宙線研究所附属神岡宇宙素粒子観測装置「スーパーカミオカンデ」の破損事故等に係る事故対策委員会等の設置要綱

I 設置目的

平成13年11月12日、東京大学宇宙線研究所附属神岡宇宙素粒子観測装置「スーパーカミオカンデ」において、光センサー破損および地下タンク水漏れ事故が発生した。同施設は世界中の研究者が注目する成果をあげ、社会的関心も極めて高い。このたびの事態について東京大学として適切な対応が求められる。全学的な協力体制のもと、外部の識者の協力も得的確かつ速やかな原因究明を行い、万全の方策を講じることが必要である。

次のとおり、総長のもとに小間副学長を委員長とする全学的な事故対策委員会を設置する。また、同委員会のもとに吉村宇宙線研究所長を委員長とする事故原因究明等委員会を設置する。

II 事故対策委員会

1 構成

委員長：小間 篤 副学長
 委 員：山田 作衛 素粒子原子核研究所長（高エネルギー加速器研究機構）
 柘植 綾夫 三菱重工業(株)技術本部長
 小宮山 宏 工学部長
 佐藤 勝彦 理学部長
 吉村 太彦 宇宙線研究所長
 福山 秀敏 物性研究所長
 石川 正俊 広報委員長

2 任務

- (1) 事故の原因究明の審査
- (2) 今後の対策・方針の検討
- (3) その他必要な事項及び連絡調整

Ⅲ 事故原因究明等委員会

1 構成

委員長：吉村 太彦 宇宙線研究所長
委員：笹島 孝夫 (社)日本造船工業会顧問
鈴木 厚人 教授 (東北大学)
中村 健蔵 教授 (高エネルギー加速器
研究機構)
藤原 俊隆 教授 (名古屋大学)
H. Sobel 教授 (カリフォルニア大学
アーバイン校)
鈴木洋一郎 教授 (宇宙線研究所)
戸塚 洋二 教授 (宇宙線研究所)
松本洋一郎 教授 (工学部)

2 任務

- (1) 事故の原因究明
- (2) 今後の対策の検討・実施
- (3) 上記(1)、(2)に係る事故対策委員会への報告その他必要な事項及び連絡調整

名誉教授制度検討委員会報告

本年6月評議会の下に設置された名誉教授制度検討委員会から報告書が提出され、了承された。

報告書は、「名誉教授の資格要件」「名誉教授の資格要件の特例」「選考委員会の組織」「名誉教授候補者の推薦」「議決の要件」「名誉教授称号授与時期」「功績調書」の7章から構成されている。

なお、この報告書に基づき、東京大学名誉教授称号授与規則の一部改正が、同日の評議会に提案され、次回の評議会で再度議論することとなった。

(規則改正及び報告書は、次回の評議会終了後に掲載する予定)

≪ 特別記事 ≫

宇宙線研究所附属神岡宇宙素粒子研究施設 (スーパーカミオカンデ)における光電子増倍管破損についての記者会見

11月13日(火)に宇宙線研究所附属神岡宇宙素粒子研究施設(スーパーカミオカンデ)における光電子増倍管破損についての記者会見が行われた。

会見には、小間副学長、廣渡総長特別補佐、吉村宇宙線研究所長、石川広報委員長が出席し、吉村宇宙線研究所長から本事故に関する発表が行われた。

発表によると、本年夏から水を抜いて改修工事を行っていたが、改修工事が終り、水を注入していたところ、数秒間の大音響と振動があった。タンク内の水中にテレビカメラを下ろして調べたところ、光電子増倍管の破損が確認されたとのこと。現在、破損に関する調査が始



記者会見の様子

まっており、水位調査を行ったところ、9時間で3cm程度水位が低くなっていた。壁面に亀裂が入り、水が漏れている可能性がある。人や環境への影響については、今のところ特に問題があるとは聞いていないが、詳しい水質調査を行い、然るべき対策をとることとしている。

なお、事故原因は現時点では不明であるが、事故対策委員会及び事故原因究明等委員会を設置し、現地の対策班とこの委員会とで、原因を早急に解明していきたいとのことであった。

≪ 部局ニュース ≫

人文社会系研究科・文学部で外国人留学生見学旅行を実施

人文社会系研究科・文学部では11月6日（火）・7日（水）の両日、恒例の外国人留学生見学旅行を実施した。参加者は、留学生36名、引率の教職員13名の合計49名。両日とも天候に恵まれた初日は、いろは坂を通過して中禅寺湖畔へ入る橋の欄干で名物の猿の歓迎を受けた。日本で一番高い所に広大に広がる中禅寺湖を見て、留学生達は感激していた。

中禅寺湖畔で昼食の後、華厳滝を見学し、「滝の雄大さ」或いは「大自然の力強さ」のいずれかを感じ取ったようであった。いろは坂を下る途中、男体山に住む猿の群れが、道路まで出てきて「お見送り」をしてくれたのが非常に印象的だった。

その後、東大理学部附属植物園日光分園を見学し、専門の教官よりさまざまな植物に関する説明をしていただいた。とりわけ植物の「神秘」に関する説明では「自然のすばらしさ」に驚嘆しつつ、本日の最終目的地である、宿泊先の鬼怒川に向かった。その夜は、食事を兼ねて懇親会を行い、この旅行のもう一つの目的でもある親睦を深め、楽しい時を過ごした。

翌日は、日光東照宮に向かい、五重塔、東照宮本殿、東回廊・眠り猫、薬師堂（本地堂）、坂下門／奥社等を見学（写真参照）。きらびやかな建物に目を驚かせ、荘厳さなど、日本の文化の一端を感じ取ったものと思われる。そこで昼食をとり、午後2時に帰路についた。バスは予定どおり5時に本郷キャンパスに到着。思い出多き旅行の目的を無事完了した。

（大学院人文社会系研究科・文学部）



日光東照宮にて

文学部就職ガイダンス開催される

文学部では、去る11月7日（水）午後4時50分から、法文2号館3番大講堂において、来年度に就職活動を控えた学部学生（3年生）を対象に就職ガイダンスを開催し、約150名の学生が参加した。

ガイダンスは、佐藤文学部長の挨拶の後、就職活動を終えたばかりの4年生5名の学生が各自の就職活動で得た体験を披露し、最後に、文学部学生委員（就職担当委員）の今村教授が就職活動に対する話をされ、全体ガイダンスを締めくくった。

引き続き、体験を語ってくれた4年生と、直接、話をする機会を設けたので、先輩のアドバイスを求め、熱心に聞き入っている3年生も少なくなかった。

文学部としては、就職状況が依然として厳しいことから、来年度も就職に関するガイダンスを企画したいと考えている。

（大学院人文社会系研究科・文学部）



体験を述べる4年生

千葉演習林公開講座「緑の教室」を開催

千葉演習林では、100有余年にわたり蓄積した森林・林業に関する教育・研究の成果を地域の教育活動に活かしていくことも大学演習林の社会的貢献のひとつと考え、10月23日（火）午前9時から午後4時まで、今年で4回目となる公開講座「緑の教室」を開催しました。当教室では、森林に入って動植物に実際に触れることにより森林の仕組みや機能を正しく理解してもらう、苗木の植え付けや“ぶり縄”を使った木登りを体験すると共に枝打ちや間伐などを見学することにより適正な森づくりを学んでもらう、そして、人間生活にとって大切な森林の持続的利用について考える手掛かりを提供し、より森林を身近に感じてもらうことを目的としています。

また、「緑の教室」は、天津小学校5年生の総合学習「自然は私のパートナー：森林の秘密を探ろう」の授業の一環としても取り組まれています。生徒は、身近な森林や地域の人々と関わることを通して、地域の自然や森林について興味を持ち、詳しく調べることができ、学習を充実させることができます。これらの活動の様子を紹介するためのテレビ取材がありました。企画は千葉県教育委員会で、大学演習林が地元小学校の教育活動に積極的に関わる「緑の教室」を、「今、学級で……地域に根ざした教育活動」として県民に紹介する番組です。放送は11月25日（日）午前9時30分～50分、千葉テレビです。

「緑の教室」の参加者は、地元天津小学校5年生とその保護者、引率の先生を含めて約100名でした。参加者は4グループ（1グループ約25名）に分かれ、千葉演習林職員の指導により、「森林の探検」と「森づくり」を体験しました。「森林の探検」ではモミ・ツガ天然林やスギ・ヒノキ人工林を約2km散策、職員から森林の仕組みや動植物の生態などの説明を聞きながら、参加者は動植物に実際に触れ、森林の成り立ちや生物を観察し、それを「フィールドビンゴ」の用紙に記録を取りながら学習しました。「森づくり」では、今年から演習林の一部を「天津小学校の森」と位置付け、本格的な森づくりを実践しました。400㎡（10m×40m）の林地にイヌマキの苗木約200本を植付け、アブラギリの種子約1,000粒を蒔きました。今後、この森がどう生育するのか楽しみです。また、“ぶり縄”を使って木登りをしたり、ロボット枝打機によるスギの枝打ちやチェンソーによるスギの間伐を見学しました。その他に、清澄寺の「千年スギ」の樹高（47m）をブルーメライスで、胸高周囲（14.7m）を巻尺で測定したり、森林博物資料館の見学をしました。特に、「千年スギ」の大きさや寿命の長さに皆さん圧倒されていました。昼休みには直径が約10～15cmのスギとヒノキの丸太切りを行いました。樹種によって木の臭いや、ノコギリで切る感触の違いなどを体験しました。切った円板は思い出の品として持ち帰りました。

千葉演習林では各グループ、枝打ち・間伐・木登り班、植付け班、救護・連絡班、学生宿舎での接客などにそれぞれ2名ずつ職員を配置し、資料館の説明と千葉テ

レビは山本林長が対応し、総勢17名で取り組みました。また、才木技術官による小学校5年生へのアンケート調査を行いました。「緑の教室」を受講する前後で森林に対する生徒の意識がどう変化したのかを調べました。早朝まで降っていた雨も上がり、暖かな快晴に恵まれ、お陰でヤマビルの活動が活発になり、校長先生、男子生徒と保護者の合計3名が手や足を吸血されましたが、大きな事故もなく有意義で楽しい1日を送ることができました。(大学院農学生命科学研究科附属千葉演習林)

≪ 掲 示 板 ≫

平成13年度教育実習・介護等体験懇談会開かれる

平成13年度の教育実習が11月上旬でほぼ終了し、介護等体験も約半数の体験が終了したので、去る11月9日(金)午後5時45分から本学山上会館において、教育実習校及び介護等体験関係の先生方をお招きして懇談会が開かれた。

大学側からは、総長、小間副学長、事務局長をはじめ各学部長、教職課程委員会委員、教育学部附属中等教育学校教諭など約70名が参加して、教育実習校及び介護等体験校等の方々に対してご慰労申し上げるとともに、感謝の意を表した。

懇談会は佐々木総長の挨拶に始まり、藤田教育学部長の挨拶、三橋附属中等教育学校副校長による教育実習経過報告の後、古田教養学部長の発声により乾杯が行われた。

しばらく歓談の後、文学部と理学系研究科の教育実習生2名から、教育実習を行っての感想等の報告が行われた後、教育実習校側から、東京学芸大学附属高等学校教育実習担当教諭2名と清水海城中・高等学校教頭、草川附属中等教育学校副校長に、教育実習についてのご感想、ご意見及びご助言を頂いた。

また、教育学部の介護等体験者2名から、介護等体験の体験談等の報告が行われ、続いて池田東京都社会福祉協議会福祉人材センター研修室主任と、飯野東京都立村



飯野東京都立村山養護学校長

山養護学校長より、介護等体験についてのご感想、ご意見及びご助言を頂いた。

会は、終始なごやかな雰囲気で行われ、佐藤文学部長の閉会の挨拶をもって午後7時30分頃散会した。

(大学院教育学研究科・教育学部)



池田東京都社会福祉協議会福祉人材センター研修室主任

ソウル国立大学混成合唱団・東京大学音楽部コールアカデミージョイントコンサートの開催について

2002年ワールドカップが日韓両国の共催により開催されます。この開催を記念するとともに、これを契機として、日頃交流や演奏機会の少なかった日韓のアマチュア合唱文化の紹介と友好関係の一層の深まりを目指して、学生主催によるジョイントコンサートを開催します。ぜひ足を運びください。

日時：2002年1月16日(水) 開場17:45 開演18:30

場所：文京シビックホール大ホール

住所文京区春日1 16 21

最寄駅営団地下鉄丸の内線・南北線後楽園駅1分

都営地下鉄三田線・大江戸線春日駅1分

JR 総武線水道橋駅8分

入場料：全席自由1,000円

曲目：

〔ソウル国立大学混成合唱団単独ステージ〕未定

〔音楽部コールアカデミー単独ステージ〕

「合唱のためのコンポジション第三番」

作曲：間宮芳夫指揮：永井誠

「ルネッサンス・ヨーロッパ世俗曲の旅」

作曲：Heinrich Isaac ほか指揮：有村祐輔〔合同ステージ〕

ヘンデル「メサイア」より

作曲：G.F. Handel 指揮：Chongsoo Won

問い合わせ先：音楽部コールアカデミー

学生部学生課教養掛内線：22529、22514

入場券ご希望の方は、上記の何れかにご連絡下さい。

また、チケットピアでも取り扱っています。(学生部)

特別講義と公開討論会開催のお知らせ

昨年度に引き続き利根川進マサチューセッツ工科大学教授、学習と記憶センター所長をお招きして特別講義を開催します。多数の参加をお待ちしております。

!特別講義「脳科学の世紀」

日時：平成14年1月8日(火)午後2時~3時半

場所：安田講堂

座長：廣川信隆医学系研究科教授

対象：主に研究者・学生

また、同教授、各界の有識者及び本学の教官を交えて公開討論会を開催しますので、多数の参加をお待ちしております。

!公開討論会「大学の教育研究体制と運営システム」

日時：平成14年1月11日(金)午後3時~5時半

場所：安田講堂

討論内容：「大学の教育研究体制と運営システム」

パネリスト：利根川進 MIT 教授

加藤紘一ライフサイエンス推進議員

連盟会長、衆議院議員

立花隆評論家、元本学先端科学技

術研究センター客員教授

廣川信隆医学系研究科教授

黒田玲子総合文化研究科教授

司会：小間篤副学長(理学系研究科教授)

対象：教職員・学生

申込方法：

希望者は、特別講義・公開討論会のどちらを聴講希望

か(両方を聴講希望であればその旨)氏名、所属、連絡先を記載の上、

FAX：03 5689 7344

往復はがき：〒113 8654 東京都文京区本郷7 3 1のいずれかにより事前に東京大学研究協力部国際交流課へ申し込んでください。おって「聴講案内」を返信します。ただし満員となった場合は申込みを締め切りとさせていただきます。

問い合わせ電話：

03 5841 2091

公開討論会 対象/教職員・学生

大学の教育研究体制と 運営システム



利根川 進



加藤 紘一



立花 隆



廣川 信隆



黒田 玲子



小間 篤

日時:2002年1月11日(金)

午後3時00分~5時30分

会場:安田講堂

参加者

利根川 進 MIT教授

加藤 紘一 ライフサイエンス推進議員連盟会長・衆議院議員

立花 隆 評論家、元本学先端科学技術研究センター客員教授

廣川 信隆 医学系研究科教授

黒田 玲子 総合文化研究科教授

司会

小間 篤 副学長(理学系研究科教授)

利根川 進 特別講義 対象/研究者・学生

脳科学の世紀

日時:2002年1月8日(火)

午後2時00分~3時30分

会場:安田講堂

※詳細は国際交流課ホームページをご覧ください。

<http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/gakunai/kenkyou/kokusaiweb/tonegawa.html>

申込方法:希望者は、特別講義・公開討論会のどちらを聴講希望か

(両方を聴講希望であればその旨)、氏名、所属、連絡先を記載の上、

E-mail:kokusai-t@adm.u-tokyo.ac.jp

FAX:03-5689-7344

往復はがき:〒113-8654 東京都文京区本郷 7-3-1

のいずれかにより事前に東京大学研究協力部国際交流課へ申し込んでください。

おって「聴講案内」を返信します。

ただし満員となった場合は申込みを締め切りとさせていただきます。

問い合わせ 電話:03-5841-2091

E-mail:kokusai-t@adm.u-tokyo.ac.jp

主催:東京大学

「日本学術振興会 外国人著名研究者招へい事業」による事業



1987年ノーベル生理学・医学賞 受賞
マサチューセッツ工科大学教授、学習と記憶センター所長

東京大学環境安全研究センターシンポジウム 開催について

東京大学環境安全研究センターでは、12月19日午前10時より、東京大学大講堂（安田講堂）において、第11回環境安全研究センターシンポジウム「環境汚染と生態系—新たなりスクと対策—」を開催する。

佐々木毅東京大学総長による講演の他、堤治大学院医学系医学科教授「環境ホルモンと生殖医療」、正木春彦大学院農学生命科学研究科教授「遺伝子組換えと食品」などの講演を予定している。

日 時 平成13年12月19日（水）

午前10時から午後5時頃まで

場 所 東京大学大講堂（安田講堂）

参加方法 参加ご希望の方は往復葉書に住所・氏名（返信用にも）・電話番号・職業をご記入の上12月5日（水）までにお申し込みください。当日参加も可能ですが、混雑が予想されますので事前申し込みをお願いいたします。

参加費 無料

参加申込先 〒113-0033 東京都文京本郷7丁目3番1号
東京大学環境安全研究センター
事務室 TEL 03-5800-6878

『あなたのゴミは
みんなのゴミです』



≪ 事務連絡 ≫

人 事 異 動 (教 官)

発令年月日	氏 名	異動内容 (新官職)	旧 (現) 官職等
13. 11. 15	江里口 正 純	(辞 職) 辞 職	医科学研究所附属先端医療研究センター教授
13. 11. 16	高 増 潔	(昇 任) 大学院工学系研究科教授	大学院工学系研究科助教授
〃	千 葉 学	大学院工学系研究科助教授	大学院工学系研究科助手
〃	升 本 順 夫	大学院理学系研究科助教授	大学院理学系研究科助手

人 事 異 動 (職 員)

発令年月日	氏 名	異動内容 (新官職)	旧 (現) 官職等
13. 11. 16	苫米地 令	総務部人事課長 (転 出)	文部科学省大臣官房総務課情報開示官
13. 11. 16	日向野 隆 司	文部科学省大臣官房人事課専門官	総務部人事課長

≪ 訃 報 ≫

藤田 夏樹 教授

東京大学大学院農学生命科学研究科教授・藤田夏樹先生は2001年10月15日午前7時46分、ご病気のため逝去されました。享年51歳でした。

先生は本学農学部を卒業された後、直ちにアジア経済研究所へ就職されました。その後、米国ペンシルバニア大学で地域経済学博士を取得され、イースト・ウエストセンター研究員を経て、1986年には本学農学部の助教授に任ぜられ、15年間にわたり研究・教育に従事されました。1994年には農学部教授に昇任されております。

先生は、インドの貿易自由化政策と経済発展との関係を総合生産性の向上という視点から数量的に評価する研究、インドネシアの貿易政策を同国の雇用機会創出という観点から評価する研究、我が国の穀物輸入量の多寡について国際貿易理論の視点から評価する研究など、開発政策ならびに農業政策を巨視的な視点、国際経済学的な視点から評価するという研究を精力的に行って参りました。特に、アジア諸国の産業連関表の作成と応用につき



ましては、開発政策の策定と総合評価に役立つすばらしい研究であると内外から高く評価されております。

病床にあっても著書の執筆活動や、学生の論文指導を行うなど、学問に対する厳しさや学生に対する暖かいお人柄を我々に示してくださいました。多くの優秀な人材を育成してこられたことは、申すまでもありません。

また、先生は1996年には総長補佐として大学行政の中核に参画され本学の運営に多大な貢献をなされました。通常1年任期の総長補佐も先生の能力が非常に高く評価され、さらに1年間続投されました。この時期には農学部スタッフ会議のメンバーとして、農学生命科学研究科ならびに農学部の抱える難問の処理にもご尽力されました。このような多忙な時期にあっても、先生は自らの研究の手を緩めることはありませんでした。要職の合間の研究は清涼剤であったに違いありません。

先生のお別れ会における多くの方々からの弔辞はみな感動的なものでした。世界中の多くの研究者からも心の籠もった弔電が寄せられました。先生のご功績とお人柄を偲び、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(大学院農学生命科学研究科)

分散の分散

昔、実験データの評価をしていた時に、信頼性の問題にぶつかった。得られたデータの分散がわかれば、そのデータの将来の再現性がわかるのだが、正しい値がわからないので分散も実験データから何とか推定せねばならない。すると、その推定値の信頼性が再び問題になり、分散の分散を推定することになった。かくして、分散の分散の分散…とどこまで行ってもキリがなく、結論は「確率90%をもってこの分散が正しいことになるので、それを信頼すると確率80%をもって次の分散が正しいことになり、それを使えば、結局、実験データの信頼性は70%です」ということになった。

大学にも競争的研究資金をというかけ声とともに、研究費のかかなりの部分が新しい制度に切り替わった。昨今の経済情勢下では、予算を均等に配分しようとしてきたこれまでの方式では、研究を支え切れなくなったのが主な要因と思われる。しかし、当然、どの研究を支援するかという評価が新しいシステムの死命を制する。将来のことを正確に見通せる評価者がいる時のみ、このシステムは有効である。

これまで評価者を育てる努力を払ってこなかった我が国は、さし当たり権威ある大研究者に委託したり、多くの研究者による相互評価の



平均値で決めたりしている。しかし、小生の回りを見ても研究の能力と評価の能力はかなり異なっている。特に平均値で決めるやり方では、時代に大きく遅れるシユニークな研究が抜け落ちる。優れた研究ほど旧来の常識と鋭く対立するこの分野の宿命を考えると、これは致命的だ。さらに霞ヶ関の予算を配る側は短時間で部署が交代し、どの評価者がどの研究を育てたのか長い時間をかけて見極めることはしていない。評価者にも評価が必要で、研究予算に望みを託す研究者としては、

そこがいい加減ではたまったものではない。

小生はある所で評価者にも競争的環境が必要であるので、研究の評価は民間のシンクタンクにまかせて、その評価の能力を予算を配る側でさらに評価して、優れた評価者だけを選び出してはどうかと提案したが、民間シンクタンクではその株主の関連研究に配慮せざるを得ないだろうという、もっともな反論を受けて窮してしまった。未来を信頼性高く見通すためには、評価者の評価者……と相当な時間と予算をもって事に当たる覚悟が必要で、当面の経済情勢とは別に長期的に取り組むべき問題だ。そもそも将来のことを見通せる人を適職につけることができているなら、今日の我が国の苦境はとっくに回避できていたに違いない。

千里の馬より名伯楽の方が得難いのは昔からよく知られていた筈のことなのだが……

(先端科学技術研究センター河内啓二)

(淡青評論は、学内の職員の方々にお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。)

[訂正]

「学内広報」No.1224 (2001. 11. 14) において一部誤りがありましたので訂正してお詫びします。

表紙「目次」の中掲示版項目内

(誤) 春期 → (正) 秋期

15ページ 春期環境整備週間決まるタイトルと文中1行目

(誤) 春期 → (正) 秋期

[次号の原稿締切]

12月5日(水)午後5時

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務課広報室を通じて行ってください。

No. 1225

2001年11月28日

東京大学広報委員会

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学総務課広報室 ☎ (3811) 3393

e-mail kouhou@adm.u-tokyo.ac.jp

ホームページ <http://www.u-tokyo.ac.jp/index-j.html>